秋高 同窓会だより

発行者
秋田県立
秋田高等学校同窓会
印刷所
秋田マイクロ写真
印刷株式会社

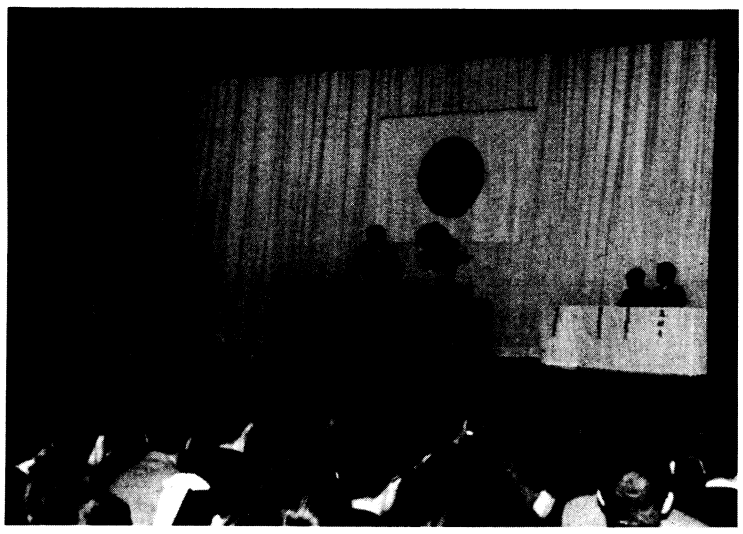
460人が仲間入り

同窓会入会式

「夢と情熱もち挑戦を」

37年卒の秋大教授　吉村氏が新会員激励

本年度の同窓会入会式は、三月七日（月）の卒業式終了後、大島紳司氏（昭47卒）の司会で母校で行われた。新たに加わったのは、男女四百六十名で、塩田雄次会長（昭5卒）の歓迎のあいさつに続き、秋田大学鉱山学部教授の吉村昇氏（昭37卒）が激励のあいさつを述べた。



入会式で後輩を励ます吉村教授

まず塩田会長は「今日からは秋高生ではなく、秋高同窓会の一員である。秋高同窓生は全国各地で活躍しているが、皆さんも秋高三年間の仲間として、同期生のつながりを強め、同窓生として互いに助けあいながら、大きな力となってほしい」とあいさつした。

続いて同窓生を代表して吉村昇氏は、自分の専門としている今ブームの超伝導の研究に触れながら、今後の大学生活を実りあるものにしてほしい旨、激励のことばを述べた。

「最近、高校での受験勉強の反動としてか、大学に入ってもあまり勉強しない学生が多く、留年が多い実情であるが、超伝導の実用化一つをとってみても、まだまだ研究を深めなければならず、実用化は二十一世紀まで待たなければならない、大学一・二年のうちに基礎学力をしっかり身につけ、何事にも挑戦する意志を大切にし、将来の生活に夢と情熱をもって、新しいことに果敢に挑戦してほしい。また、よい指導者につくことによって、自分たちだけでは掌握しきれない面を打開できる時が多く、運に恵まれることも大事だが、そのためにも日頃からの努力がなければならない。頑張ってください」

最後に新入会者を代表して、岸部雄二君が、「今まで生徒会行事等でも、同窓生の諸先輩にお世話になってきました。数多くのすぐれた諸先輩が各界で活躍していますが、そうしたすぐれた人たちへの仲間入りが、本当の意味での仲間入りとなりうるように、今後とも頑張っていく覚悟ですので、これからもご指導をよろしくお願いします」と入会のあいさつをした。

◇　◇

同窓会は恒例により、新会員の男子にネクタイピン、女子にペンダントを贈った。

八月二十一日に総会

当番年次の打合会　講師に伊藤教授迎え

本年度の当番年次（S8、S18、S28、S38、S48）打合会は四月十四日、アキタパークホテルで、大嶋副会長、太田企画委員長、各年次から二人が参加して開かれ次のような話合いが行われた。

(1)総会の運営については、昨年初めて行われた当番年次に準じて行うこととし、講演者は、東大教授伊藤隆氏（S26卒）にお願いすることにし、早々に本人の快諾を得た。演題は「今なぜ町田忠治か」とのこと。日程は案として八月二十一日（日）午後二時からと決めた。

(2)本年度発行の「同窓会だより」に対する協賛広告は、事務局から計六十コマの依頼があり、各年次に割当、了承された。

(3)来年三月に行われる新入会員入会式の司会、激励者については、S48、S28に一任する。

(4)総会には各年次より少くとも二十人を動員、会を盛り上げる。八月八日には事前打合せの当番年次の会を開催するなどを決めた。

八月十二日に女子卒業生の集い

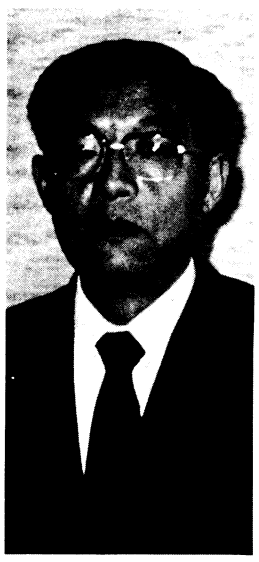
秋田市の弥高会館で

女子卒業生親睦の集い（若菜会）は八月十二日(金)午後五時半から秋田市の弥高会館で開く。

この集いは二年に一回の開催で八月に開催するのは今回が初めて。参加者は当番幹事の高橋貞子さん（S34年卒、TEL0185―45―2026）まで連絡を。

新校長に室田氏

教頭には斎藤先生



室田新校長は昭和二十六年母校卒。母校OBが校長になったのは、鈴木健次郎元校長以来、七代目、二十一年ぶりのこと。室田校長は、三十年東北大学理学部卒業後、秋田北高振り出しに教員生活に入り、四十二年教育センター指導主事、県教委高校教育課に転じ大曲高校教頭を経て再び高校教育課に戻り、首席課長補佐。そして昨年角館南高校長に就任した。

21年ぶり母校OBの校長

「進学が重要課題　部活も強めたい」

教育方針など語る

同校長は母校に勤務するのは初めて。それだけに生徒というより後輩と思いがちでつい「しっかりせい」と気合いを入れたくなると前置きし、当面の教育方針など次のとおり語った。

「この学校の生徒の良さは自主性。もちろん長所は伸ばさなければならないが、だからしたい放題にさせて良いというわけではない。自主性を尊重する一方で指導性を持たなければならない。校舎はりっぱだが残された課題は、内容の充実にある。今は仙台一高、盛岡一高など近県の進学校と比べて低迷気味だ。今年から実施した六十五分授業には教師も生徒もだいぶ慣れてきた。成果は今後に出てくるはずだ。

本校の生徒は九九%進学する。従って進学問題が最重要課題になるが、それも単に〝率〟を高めるというのではなしに、質的な向上を目指す。つまり県外の国立大学への進学を増やしたい。もう一つ大事なのは部活動にある。生徒の意欲と学校全体の士気を高めるためにもより強化したい。

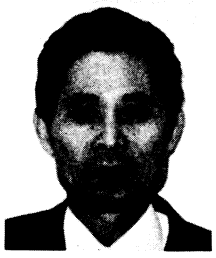
旧制秋田中学、高校（当時は秋田南高）時代は山岳部、地学部でならし、好きな登山は卒業後も続け、東北の山はほとんど登ったという。長女は嫁ぎ、秋田市南通りの自宅では夫人のかをるさん、AKTに勤める二女と二人暮らし。

本校教職員の人事異動

▽退　職
校長　榊田　清先生
講師　芋田　匡先生

▽転　出（氏名・転出先）
嘱託　泉　祐子さん
佐藤悦郎教頭（秋田北高教頭）
袴田　市郎先生　水口美知子先生
小川　進先生（秋田工高）
近藤　繁先生（本荘高）
吉田　雄弘先生（能代高）
山脇　修一先生（秋田南高）
加賀谷美保子先生（新屋高）
三浦　昭一先生（新屋高）
古谷道子先生（秋田東高(通)）
佐藤　修三先生（秋回工高）
瀬田川信義先生（西仙北高）
稲村　綾子先生（高校教育課）
淡路直明先生（秋田工高(定)）
佐藤美穂子さん（教育庁福利課）

▽転　入（氏名・前任校）
室田　弘校長（角館南高校長）



▽斎藤新教頭の略歴
昭和二十三年本校卒。秋田鉱専電気科卒業後、教員となり湯沢高、本荘高を経て五十三年から本校勤務、専攻は数学。秋田市出身。

菊池　勝俊先生（秋田南高）
斎藤　紀明先生（由利工高）
柴山　芳隆先生（秋田西高）
鍋島　太郎先生（秋田西高）
吉岡美香子先生（秋田中央高）
柴田　義弘先生（新屋高）
渡部　政徳先生（新屋高）
斎藤　裕義先生（秋田南高）
熊沢　耕生先生（大館南高）
山本　長幸先生（仁賀保高）
片桐　章先生（新採用）
奈良　一崇先生（新採用）
松田　聴先生（講師として）
久保　和子先生（〃）
佐々木裕之先生（〃）
山下三喜男先生（〃）
木村　修先生（〃）
小松けい子先生（〃）
大渕美由紀さん（県企業局）

なお斎藤廣孝先生が、本校教頭に昇任されました。

天上天下

人類で初めてエベレスト登頂に成功した、イギリスの登山家マロリー（一八八六～一九二四）は、「なぜ、エベレストに登るのか」の問いかけに「山がそこにあるから」と答えたという。山の魅力の偉大さ、登山の喜びを表現したものだが、この言葉をそのまま母校の後輩たちに送りたい。▼今年も四百七十人近くの新入生が母校の門をくぐった。中学時代は学業が優秀だったばかりではなく、福祉活動や文化活動で活躍したり、スポーツでならすなど多士済々である。入学して早くも二カ月近く、これらの生徒たちは、一日も早く秋高生になりきろうと努力しているに違いない。▼教科教室制や六十五分授業など、中学時代には体験できなかった制度や習慣が少なくないからである。教育制度の改革が指摘されて久しいが、現実は遅々として進んでいない。大学への受験戦争の厳しさは相変わらず。第一入試制度そのものが毎年目まぐるしく変わり、一部では混乱を招いているほどである。▼このことは、毎年九九%以上も進学する秋高生を取り巻く環境の厳しさは変わっていないことを意味する。ばら色の秋高生活を夢見て門をくぐった生徒たちにとって、三年間の高校生活はあまりに短く、気の毒にさえ思える。▼現実の〝受験地獄〟を生き抜くには、高校生活を堪能する間もなく、入試の準備にかからなければならないからである。心身ともに発育途中にある十代半ばの青少年にとっては、苛酷と言って過言ではない。▼だが、マロリーの根性でこの受験戦争に打ち勝ってほしい。母校の後輩はすべて全県から選りすぐれたエリートである。山登り同様道のりが険わしいほど目的が達成された後の喜びは大きいはずである。

榊田前校長、海外で活躍

何をすべきなのか時代踏まえ考えて

この三月定年退職された榊田前校長は、五月から一年間の予定でマレーシアの国立マラヤ大学に赴任された。文部省の派遣によるもので、将来日本に留学が見込まれる現地学生に日本語や数学を教える約二十人の教師団の団長を務めるかたわら、週一回「日本事情」の講義も受け持っている。

出発を前にした榊田前校長は自宅を訪れた広報委員を通じ、「秋高生の気質は、昔も今も変わらない。本質的に自由な考えを持った人間が多い。教え子を見ても自分自身の生き方を見定めて堂々と歩んでいる人が数多い。都会にはない大きな人間が育つ恵まれた教育環境にある」などと思い出を語り、秋高の先輩や先生たちに「今の人は、何ができるか、何をすべきなのかについて時代の流れを踏まえながら考えてほしい」とメッセージを送った。

横田さんから短歌

50周年記念会に出席

秋中五十期会（S12卒）の卒業五十周年記念会に出席した横田英夫氏（東京都住・医院経営）から、母校を訪問した時などの短歌が寄せられたので紹介する。

◇　◇

秋田中学卒業五十周年記念会

八丈の揃ひのネクタイ締め居れどそれぞれの歴史顔に刻める

亡き友の八十余名の名前読む僧侶もわが中学の友

目を閉じて亡き友の名を聞き居れば幼き日々の浮びてきたる

五十周年記念の我等祝うごと秋高祭に若き等集う

女生徒は浴衣姿にはなやぎて高校祭の屋台に並ぶ

宴終えて心たらひて眺め居る水心園の池の静けさ

（昭和62年9月6日）

入試に本校勢苦戦

東北大、秋大大幅に減る

東北大に現役生わずか十三名

昨年度は国公立大学の複数受験という制度の変更が本校に有利に働いたことに加えて、生徒諸君のがんばりが実を結んで、現役の合格率が六割、現浪合せた国公立大学の合格者数では東日本でナンバー・ワンという好成績を納めたのであるが、本年度入試では残念ながら一歩も二歩も後退を余儀なくされた。何よりもショックだったのは現役の諸君の東北大合格者数の激減である。昨年は追加合格一名を含めて二十二名だったのに対して、わずかに十三名しか合格できず、ここ十二年ほど保ってきた二十名以上という記録（最高は五十三年度入試の三十六名）が破れて、四十四年度（東大入試が中止になった年）の九名、四十五年度の八名を除けば、過去二十年間におけるワースト記録になってしまった。もっともこれは四月当初からある程度は予想されていたことで、トップクラスに続く層の薄さが最後まで響いたようである。加えて、東北大なら合格したであろう生徒たちがもう一つ上位の大学をねらった（秋高生の面目躍如、とも言えるが）ということもそれに拍車をかける結果になった。ただし、一浪しても初志貫徹をねらうという本校生の気質を考えると、現役のみの数字で云々することに抵抗のある向きもあろうかと思う。ちなみに現浪を合せると東北大合格者数は三十四名（昨年三十八名）で、ランキングは九位から七位へとむしろ上昇している。これには〝おまけ〟が一つついた。四月六日付の朝日新聞の文化欄に、本県出身の直木賞作家である阿部牧郎氏が、「花輪高校吹奏楽部」という一文を寄せておられるが、よく確かめもせずに、「東北大の現役合格者が三名」とか「開校以来の不振」ときめつけている。いずれも伝聞という形を取ってはいるが、甚だ不愉快な話である。縮刷版では訂正してもらうことにしているが、とんだハプニングだった。

トップクラスは善戦

暗い話ばかりではなかった。弱い、弱いと言われながら、現役で東大四名（昨年六名）、京大四名（同四名）、東工大一名（同〇名）、一橋大三名（同二名）は立派だったし、お茶の水女子大に二名（同〇名）、名大に三名（同一名）、神戸大に一名（同四名）の合格者を出した。また早稲田大九名（同十二名）、慶応義塾大七名（同五名）を含めて、私大に百十名（同百三名）合格している。総合すれば、東北大の不振を差引いても進学校としての面目は保てたのではないだろうか。なお、皮肉にも県内他高校の〝祈り〟が天に通じたのか、地元の秋田大でもかなりの減を示したが、中・下位層をみっちり鍛えて、捲土重来を期したいと思っている。

人並みで満足するなかれ

一年に何度か壇上に立って生徒諸君に話をする機会がある。昨年は、「一日も早くスタート台に立て。瀬古、中山と言えども三十分遅くスタートしたら優勝できないんだぞ」とも言ったし、「一年生は一日三時間、二年生は四時間、三年生は五時間の家庭学習が必要だ」とも説いた。部活に夢中な生徒諸君や生徒会活動に熱心な諸君にはつらいことかもしれないが、そこを切り抜けてこそ真の秋高生だろうと思う。〝人並みのことをしていては人並みの人間にしかなれない〟、私自身の自戒の言葉でもある。

（進路指導部・畠山和也）

新入生に有望スポーツ選手

スケート、卓球、剣道、野球など

今年度の新入生の中から、中学校時代に活躍した有望スポーツ選手を拾ってみると、

（スケート）

湯田　淳　スピード一五〇〇M三〇〇〇Mで東北一位、全国的レベルでも優秀な成績。

若林育子　スピード三〇〇〇M全国優勝、カルガリ冬季オリンピック選考大会にも出場。

（卓　球）

高橋英人　全県ランキング二位トップレベルの選手として期待できる。

竹谷みな子　全県大会三連勝と県内では敵なし、東北大会準優勝、全国大会入賞。

（剣　道）

今年は例年になく体格に恵まれた選手が多く、今後鍛えごたえがある、とは渡辺明監督の弁。全県優勝チームの天王中から二名、ほかに全県レベルの実力をもつ者が多数入部。中には個人優勝した選手（羽城中）もいる。

（硬式野球部）

一年生が十八名も入部したが、大型捕手として期待される阿部茂樹（大潟中）、全県優勝チームの秋田南中の金谷忠浩（捕手）、田口和幸（センター）や準優勝チーム秋田東中の強打者の小塚晃央（センター）など有望選手が目立つ。

一年に三回会報を発行

常置委合同会議

本年二月四日、学校に大嶋副会長、常置委員幹事のお集まりをいただいて、新常置委員の方々の推せんと今後の運営について話合いを行った。

その話合いにより、二月二十五日、栄太楼旅館に於て合同委員会を開催、まずそれぞれの委員会に分かれて、委員長などの選出、今後の委員会の持ち方などについて協議、次いで一同に会して委員の紹介、協議に入る。

その結果、新年度の会の運営について各委員会より次の提案あり、了承された。

(1)これまでの会長幹事会に、常任理事を加えて広く意見を聞く。(2)「同窓会だより」をこれまでの年二回発行から三回（四月下旬、九月中旬、十二月下旬各号四頁計十二頁）発行する。(3)年次強化策として同期会（特に若い年次）の開催を促進する。

(3)についてはその具体策を企画委員会などで検討していただくこととした。

新委員の顔ぶれは次の通り。

▽企画委＝伊藤守一（常理20定）太田寿男（幹25）、岸部恵一（理30）、柴田協子（理32）、畠山樹之（幹38）、清水昭男（理46）、山口武秀（理49）、㊫佐藤直彦（常理21）、斎藤広孝（常理23）。

▽財政委＝小玉順一郎（幹20⑤）豊口祐一（幹34）、佐渡谷栄悦（理35）、速水洋子（常理39）、高橋智徳（幹40）、竹谷繁（理43）、佐野元彦（49）、㊫石井直明（常理20④）田口能祐（常理22）。

▽名簿委＝◎廣島吾朗（幹23）、加藤昭男（理定27）、今田猛（31）〇工藤雄一（常理33）、那波年雄（常理34）、五十嵐和子（理38）、大久保正樹（42）、佐藤英明（常理46）、佐藤洋（理46）、佐藤悦紹（常理49）、成田良実（理54）、㊫佐藤正（常理25）、伊藤仁（常理30）。

▽広報委＝◎信太聡一（幹27）、山寺慎子（理30）、大和宇一（34）羽柴昭雄（35定）、谷野亮平（38）、石井仁（42）、田口清洋（常54）、㊫佐藤晋（常理30）、出口金也（常理30）。

（◎印は委員長、〇印は副）

田上先生を偲ぶ

（S12年卒）桜谷吾朗

恩師田上四方一先生（昭4・3～昭17・3本校勤務）は、昨年十一月三十日、八十五歳で急逝された。先生のご健在を知ったのは、私たち秋中五十期会が、昨年卒業五十周年を祝う事業のひとつとして、記念誌を刊行し、ご健在の諸先生に贈呈したところ、本荘市にお住いの恩師高山重雄先生からそのご健在を知らされ、早速幹事の伊藤博次君が記念誌をお送りしたところ、近況を添えた水彩画入りの達筆なお礼状が届いた。その中に、先生の長寿の秘訣を語るように「心寛寿自延」（号紫峰）の一書が入れられていた。

先生は、私の一年の時の担任で、卒業まで国語を教わった思い出が多く、懐かしさひとしお早速一年の時の学級写真のコピーを入れお便りしたところ、思いがけず元気なお声でお電話をいただいた。その後、数々の秋田での思い出と転出後の経歴を知らせるお便りを頂だいした。

それによると、郷里の女学校を最後にして、昭和二十二年三月、若くして教職を退き、その後はいろいろの企業の社長などを三十四年も勤められたとのこと。その間、岡山簡易裁判所調停委員、日本棋院岡山県支部連合会長など、社会的にもいろいろとご活躍された。

『私も既に八十五歳、頭には白雪を頂き、眼は遠山の霞、耳は自然の騒音に打ち消され、而し一種原付のオートバイで遊び歩き、悠々快適の日々を送っています。家族は、私達夫婦と二男夫婦、孫二人（ともに大学生）の六人暮しです』とあり、先生の日々の生活が想像されるようなお便りであった。

電話の時「はたはた」の話がでたので、早速「鰰寿し」をお送りしたところ、折り返しまた岡山の名産品に長文の手紙を添えて送られて来た。それだ着いたのが十二月二日で、私が喪主の隆三氏（二男）より亡くなられた電話をいただいたのが九日であったので、思い出して手紙の日付を調べたところ、なんと十一月三十日となっていた。私への手紙が絶筆になったのではないかと思われる。

仏事がすべて終ってから、長男悌三氏（福岡市南区長住四-一〇-一九）より、亡くなられた時のご様子を知らせて来た。『その夜の八時半頃好きな風呂に入って髭を剃り、髪を洗ってさっぱりしたところで心臓が止まったと聞き、天衣無縫と申しますか、何でも自分流にやって来た父の、いかにもその最後らしいと思えてなりません』と。先生の幸福な晩年と大往生の様子が偲ばれる。心から先生のご冥福とご遺族のご多祥をお祈りします。（合掌）

哀悼

（判明分・敬称略）

小野岡　清	S5	森吉町	62・11
加賀屋富四郎	S27	秋田市	62・11
山田　清	S28	秋田市	62・11
平沢　立三	S22	横手市	62・11
大里　文祐	T10	鹿角市	62・12
沓沢　達雄	S17	秋田市	62・12
後藤　政雄	S8	大阪府	62・9
田上四方一	旧職	岡山県	62・11
田村　道有	T15	湯沢市	62・12
福島　芳男	S6	稲川町	62・12
三沢太吉	S6	神奈川県	62・12
山村　友弥	S15	秋田市	
鈴木　常新	T11	秋田市	63・1
進藤千代吉	旧職	協和町	63・1
今野　哲夫	S17	鳥海町	63・1
簗瀬　満	S35	秋田市	63・1
小原　繁	S25	大曲市	63・1
大島正夫	S5	いわき市	63・1
山崎　宏	S29	秋田市	63・1
石塚　正雄	S4	大館市	63・1
台屋　重廣	S30	秋田市	63・1
石川良之助	T15	秋田市	63・2
小西幸治郎	T10	秋田市	63・2
伊藤　嘉一	S20	秋田市	63・3
高泉　寛治	T11	秋田市	63・3
大沼　滉	T5	藤沢市	63・3
備前　義正	S11	小坂町	63・3
高橋　郁夫	S26	秋田市	63・3
森田　忠雄	S6	秋田市	63・4
菊地永太郎	S47	五城目	63・4
菅原澄雄	S36	フランス	63・4
森川　正樹	S47	千葉県	63・5

大嶋民治（S8卒）
秋田市保戸野原の町二－三四
TEL〇一八八－二三－二六五九

株式会社 本金西武
取締役会長
小玉得太郎（S18卒）
秋田市保戸野中町五－三九
TEL〇一八八－六三－五〇一七

医療法人 白雄会理事長
白根病院院長
秋田県社会保険診療報酬支払基金専任審査員
白根雄二（S18卒）
秋田市旭北栄町五の二九
☎〇一八八－六二－二三三〇（代）
自宅☎〇一八八－六四－六三一八

青井陶器店
青井啓二（S28卒）
秋田市大町一丁目三－二七
TEL〇一八八－六二－二七四六

有限会社中山洋服店
婦人服 未来（みき）
代表取締役
中山文夫（S28卒）
本部 秋田市大町五丁目三番三五
TEL〇一八八－二三－〇六三五
TEL〇一八八－六二－六二六八

銘茶 繁田園
繁田義一（S28卒）
秋田市大町三－一－一
TEL六二－二三三五

卒業40周年記念し植樹

六十二期会

私共六十二期会生二百五十八人は、昭和十八年入学、昭和二十三年卒業で、大東亜戦争の最中から終戦、戦後処理の混乱した変せんの激しい時代を体験した学生である。この五年間学舎は、手形の校舎からはじまり、高清水の帝石、市内の小学校での分散授業、最後は旧兵舎で窓ガラスも満足にない、またストーブの薪もままにならず、南京虫のはびこる中での授業とジプシーのような学校生活を送り、昭和二十二年建築されたただ一棟の新校舎で昭和二十三年卒業したことは多くの方々はあまりご承知ないかと思う。それから四十年を経過した現在になっても、私共の時代と隔世の感のある校舎、設備、環境ではあるが、学校を想う心、愛する心、思慕の念は全卒業生に優るとも劣らないと自負しておるものである。

そこで私共は、卒業四十周年記念事業の一つとして学校に植樹することを計画し、校長先生に申し言れたところ喜んでお受けするということになったので、早速さる四月二十三日、六十二期会代表八人で、秋田市が一望のもとに見ることが出来、また天上はるかに太平山の望める学校の通学路（坂道の中間）に欅を植えた。樹高約七～八米、太さ約三十五糎、根元に記念標柱、庭石を配しミニ庭園風にした。

私共はこの樹の伸び、四季折々の変化に対応した色、形、自然美、風格等は秋田高校の姿と一脈相通ずるものがあるのではないかと思われてならない。

今萌黄色の若芽が芽吹いて清楚な感じですが、確実に大地に根をつけたことを示し、将来に向かって雄々しく生きることを約束し、私共に何か教訓じみたことを感じさせている。

二百人集まり旧交を温める

秋田市役所羽城会

秋田市役所羽城会総会が一月八日、秋田ビューホテルで開かれた。

当日は会員二百五十八人のうち約二百人が出席、また母校・同窓会本部からは榊田校長・京野副会長、桜谷事務局長にご出席をいただいた。

はじめに、事務会計報告、監査報告、新会員の紹介などを行って総会を終了し、引き続き懇親会に移った。

高泉会長（秋田市教育長）の開会のあいさつの後、来賓を代表して高田秋田市長からお祝いと激励のあいさつをいただいた。

続いて榊田校長・京野副会長より母校の現状や同窓会の活性化状況などについて報告いただいた後、照井顧問（秋田市助役）の音頭で乾杯した。

宴たけなわには、母校の応援歌も飛び出すなど、終始なごやかな雰囲気のうちに一年ぶりの旧交を温めた。

川柳語呂合わせくじ引きも

能代山本支部総会

総会は、例年十二月忘年会を兼ね開会していますが、今年も十二月十八日料亭宮茂登（塩谷会員）で、本部より京野副会長、桜谷先生をお迎えし開会した。

最初に三浦支部長の挨拶があり、続いて京野副会長より挨拶を兼ね同窓会活動報告等、桜谷先生より学校の近況報告、塩谷会員から支部の会務報告、新入会員紹介で総会を終え、西村副支部長の乾杯で懇親会に入りました。

ここ数年地元会員の減少、また出席者が少なくて残念に思っていたところ、郵便局より二人の課長、秋銀能代支店長外三人、羽銀能代支店長と出席を得て久し振りの二十人の大台の盛会となりました。お酒の酌み交わすにつれ大先輩の数十年前の母校の話し、地元経済の話し等、会の盛り上がったところで恒例の斎藤幹事長による豪華？景品の当たる川柳語呂合わせくじ引きがあり、時間の経つのを忘れましたが本部の副会長、先生の帰りの時間となり、宮腰会員（応援団ＯＢ）の音頭で応援歌、校歌の斉唱で散会としました。

六十九人が出席久しぶりに盛会

節目の「二八総会」

恒例の二八会総会が二月十三日（土）、秋田ターミナルホテルで開催された。高校卒業後三十五回目の一つの節目ということもあり、当日は、県内外から同期生六十九人が出席、恩師の三浦、深井、吉井、菅原、加藤の諸先生、また仙台から氏家先生のご臨席をいただき久しぶりに盛会であった。

総会は、渡部達郎君の司会により、幹事挨拶、校歌斉唱、物故者への黙祷など、とどこおりなく進み、最後に副歌を斉唱し散会した。

なお、三十五回総会を記念し「きゅうす台」を記念品として配布した。（福田　記）

つどい

寒かった土崎通学

26年卒同期会　70人が飲み語る

寒さきびしい一月十六日。我々二十六年卒の総会は秋田市・平安閣で行われた。

終戦の二十年―冬、秋田市から北風の吹き荒ぶ凍て付く国道を歩いて土崎途通学した石油学校の仮校舎。南京虫、ＤＤＴ。駅前にあった薄暗い兵舎の教室。ひもじい毎日。様々の思い出を残して、昭和二十六年三月母校に別れを告げて以来、三十七年の歳月が過ぎ、互いに白さが目立ち、下腹の気になる五十五歳となった。

人それぞれ、様々な人々との出会いがあり、交わりがあっただろうが、一番気のおけないぬくもりのある集いは、この同期会をおいて他にない。だからかけがえのないこの宴（うたげ）を大切にして行きたいと考える。

市内在住の鈴木勝三郎先生、深井博之先生、桜谷吾朗先生、加藤仁美先生、四恩師もわざわざ出席いただき、我々七十人、数年ぶりのなつかしい顔ぶれもちらほら、血の気の多かった昔に帰って、飲み、食い、語り、時のたつのも忘れてなごやかな一時を過ごした。

今後総会は毎年一月第三土曜日、会場をアキタニューグランドホテルと定めて開催することに決定した。（竹谷　記）

互いの健康祝い来年の再会約束

26年卒関東地区会

二月十三日（土）、皇居前パレスホテルに於て、会員四十二人出席し幹事長佐藤二郎君の司会により開催した。

当日わざわざ秋田代表として太田洋生君が上京され一月十六日秋田平安閣に於て行われた新年会の模様又、同窓会総会規約改正年次別制等の説明があり、同君の乾杯の音頭で懇親会に入った。

初参加の木沢信君、石沢昭義君の挨拶あり盛会であった。

最後に三国屋環君の音頭で校歌、校友会歌等の大合唱のうちにお互いの健康を祝し、又来年の再会を約し拍手のうちに散会した。

なお、錦織一男君が去年三月二日能代市の病院で他界されたので、当会を代表し春日井尚正君（秋田在住）に香典を託し弔慰訪問を依頼した。

慶祝（判明分）

◎秋田市文化団体連盟特別賞　野口　達二氏（S20）
◎62年度スポーツ栄誉賞　加藤　芳男氏（S10）
◎藍綬褒章　佐々木茂雄氏（S12）
◎勲四等旭日小綬章　渡部　正一氏（S7）

充実して生きて行くことを誓う

秋田で十一紫会の集い

昭和十一年卒（十一紫会）の集いは、昨年十二月六日（日）秋田市大町協働社大町ビルで行われた。

一昨年（昭和六十一年）夏、卒業五十周年を記念して想い出の男鹿半島に一泊の旅をして旧交を温めあった翌年であったので、県内、市内を中心に今回は少数の参加ではあった。しかし、六十二年は同期から一人も鬼籍に送ることがなかったことを喜び、佐藤民治会長から「健康こそ最大の財産」と古希という人生の節目を迎える六十三年戊辰の歳をお互いに余生を充実して生きて行くことを誓い合った。

▽**出席者**　十一紫会会長佐藤民治、熊谷義一、畠山正、森義亮、伊勢啓一、市川稔、岡見辰雄、槇尾五郎、中田富重、高堂五郎、栗谷錬治、石山鐐作、熊谷與四郎、綿引漣平、畠山太郎、佐藤岩雄、佐々木六郎、小川宇一郎、目黒武士男、渡辺純一郎、菅生正雄。

十一紫会事務局は秋田市寺内字蛭根三八―二四。伊藤　馨　☎〇一八八―(24)―二五五一

秋高五五期会に名称決める

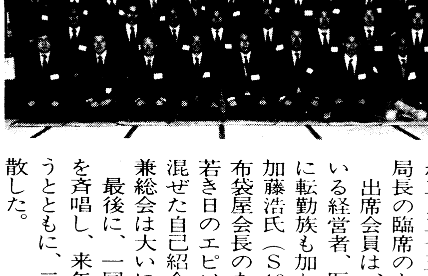
昭和十七年卒同期会

昭和十七年卒同期会を年明け早々の一月九日に同窓会から桜谷吾朗事務局長をお迎えして開催した。石垣良之君の司会で同期物故者五十五名に黙祷を捧げた後、学年代表理事秋元辰二君が開会の挨拶を述べ、ついで桜谷先生から同窓会の近況報告、年次別当番制、同窓会費の年次別徴収制度の答申経緯について説明があった後、早速協議に入り今後会の運営を計っていく上で会の規約が必要であり、これを新たに設けることに一致、細部については理事に一任することに決定して直ちに懇親会に移った。久しぶりの再会で名乗られても思い出せないのに酒と共に昔の童顔が彷彿と蘇り、刻のたつのも忘れて思い出話に花を咲かせ最後は全員立ち上がってスクラムを組み校歌を斉唱して散会した。この日の申し合わせにより二月二十二日理事会を弥高会館で開き、会の名称を正式に「秋高五五期会（略称五五会）」として会則を制定つぎの役員を決定した。

会長秋元辰二、副会長東海林広司、中村正、幹事青山忍、石垣良之、遠藤一秋、畑沢実、大塚一雄、谷口啓之助、平沢幸作、佐藤忠、相馬義一、会計幹事根岸秀治、若月孝道、会計監事照井努、池田潤一郎。（根岸　記）

一同輪になって校歌を斉唱

大館支部が総会



県北の雄都・大館市とその周辺地区で〝己れの天職を磨く〟秋中・秋南・秋高健児〟二十六人が集い、「同窓会大館支部」（布袋屋伊作会長、Ｓ20卒）の総会が二月二十五日、桜谷吾朗事務局長の臨席のもと開かれた。

出席会員は、地元で活躍している経営者、医師、教師、それに転勤族も加わって多士済々。加藤浩氏（Ｓ40卒）の司会で、布袋屋会長のあいさつ、会員の若き日のエピソードなどを織り混ぜた自己紹介へと続き、宴会兼総会は大いに盛り上がった。

最後に、一同輪になって校歌を斉唱し、来年の再会を誓い合うとともに、二次会へと流れ解散した。

秋田シール印刷㈱
小笠原康友（S28卒）
秋田市茨島二丁目十四―八
TEL二三―六六五―〇二七〇

不動産をコーディネート　㈱本山ランドシステム
代表取締役　本山恒昭（S38卒）
本社／〒010 秋田市泉字道田129－2 TEL(0188)63－8080
（泉銀座・生協泉センター前） FAX(0188)24－1500

総合建設業　中央土建株式会社
代表取締役社長　伊藤久一（S38卒）
本　社／秋田市外旭川字在家48の1　☎(0188)68－3322㈹
自　宅／秋田市大町一丁目7の27　☎(0188)23－7619

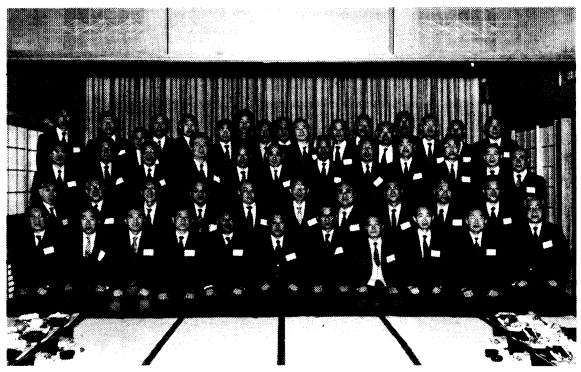
㈱東京商工リサーチ秋田支店
支店長　荒谷紘毅（S38卒）
支店　秋田市大町二丁目二番四五号　東邦生命ビル3階
電話（二三）一四四五五（代表）
FAX（二三）六三二一九六九
本社　東京都港区新橋一丁目九番六号
電話（〇三）五七四―二二一一（大代表）
支社支店全国七十七事業所

アキタパークホテル
取締役総支配人　畠山樹之（S38卒）
〒010 秋田市山王4－5－10　☎0188－62－1515
（自宅）〒010 秋田市外旭川字八幡田200－5　☎68－3481

SPACE PLAN & DESIGN ROOM
今茂尚一級建築士事務所
今　茂　尚（S48卒）
秋田市泉大橋170－5
PHONE：0188(62)2863・(24)3717

動乱の思い出話に花

〝還暦〟です20年卒同期会



昭和二十(四年卒)年同期会は六十三年二月十三日、秋田市の「川寿」で開かれた。

三吉神社神官によるお祓いの式では参列者を代表して、安杖君が神妙に、二礼、二拍、一礼を行う。また神官からの「人生五十年の時代における還暦は長寿としてお目出たい儀式であったが、人生八十年の現代では、まだまだバリバリ現役で仕事をされている人も多いが、人生の一つの折目として考えてもらい、今後の幸福を祈る……」と云う挨拶に聞きいる皆さんの顔には、万感せまるものがあった。

ついで記念写真撮影後、平塚君の司会により物故者に対する黙祷を行う。特に卒業四十周年記念同期会に参加した人達で、遠藤君や山崎君が急逝されたことや、また桜田君が先月亡くなったとの報告には一同感無量の趣きがあった。また、欠席者四十八人からの返信一言も印刷配布され、一同食い入るように読んでいた。

参加者を代表して北林君から挨拶あり。「普通ならば赤い頭巾に赤い法被でも着てお祝いと元うことになるだろうが……」出席者皆苦笑す。唯一人、金子君が部下女子職員より贈られた赤いチョッキを着用してきて居た。

その後、最も遠く神奈川から参加した三浦昭雄君の音頭で乾杯す。

松渕君の、おめでたい謡曲など披露され、相変わらず昭和動乱期の思い出話に花が咲いた。おもえば、小学校、一年か二年の昭和十二年の支那事変以来、大東亜戦争勃発が秋田中学一年生の昭和十六年十二月八日であった。中学三年一学期からいわゆる予科練に入隊する者続出、四年生の一学期終了時に学徒動員で群馬県太田・中島飛行機工場に学業を中止して出動、その間陸士合格者等は、昭和十九年十一月と昭和二十年二月に中学の卒業もまたずに入校……。そして二十年三月末、動員先の太田から手形校舎へ一時帰校、秋田中学四年卒業式を行い、記念写真を撮った。校旗保持者は今は亡き田村弘君であった。そして八月の敗戦、その間、広島の原爆や、土崎の空襲で亡くなった同期生も居るが、よくぞ、今まで無事生き長らえたものと感慨ひとしおのものがある。

さて、公務員は来年で定年、それぞれ職場を離れる人も多いので、今後我々同期会も、組織を整理し動きやすいようにしたと云う声もあり、検討したいと思っている。（山本　記）

同期が秋田、大館、土崎駅長に

昭和32年卒の同期会

昭和三十二年卒の秋高三二会は、卒業三十周年記念の同窓会を、新年一月十日にアキタニューグランドホテルに於いて盛大に催した。

母校からは榊田清学校長、小林忠雄同窓会副会長、在学当時の恩師として、吉井忠亮先生、三浦鉄郎先生、山谷浩二先生にご出席いただき、夫々のご挨拶のなかで、学校の近況、想い出話、そして励ましの言葉等を聞きながら、終始和やかに、NHKの三浦行義アナの司会で会を進行した。祝宴、歓談が続き、最後は恒例の校歌合唱で、会を閉じた。

秋高三二会と会員の動向については、次期会長に山田靖夫君を選んだ。また、同期生は社会の各層で活躍中であるが、JR東日本の二年目に、吾々同期が秋田、山形、土崎、大館の各駅長に就任することは特筆されよう。（山脇健　記）

将来は全道の大支部に

三十五人出席、札幌支部の総会

第七回札幌支部総会は、昨年十二月十四日、札幌経済センター七階の「ニュー札幌」で、本部から塩田雄次会長、榊田清校長、桜谷事務局長を迎え、地元から秋田銀行札幌支店長高橋功氏のご出席をいただき、会員三十五人が参加、盛大に開かれた。

まず、河田啓一郎支部長が挨拶に立ち、五十四年に支部発足以来、七回目を迎え、これまで役員の改選もなくやって来たが、来年度には役員改選を行い再発足したい旨の発言があった。

塩田会長は、若い方々の参加も多く誠に心強い。本部も若返りを図り活性化を進めているので、将来は全道を統合した大きい支部にして欲しいと挨拶した。

また榊田校長は、北海道インターハイのお礼、新校舎の紹介、それに伴うソフト面の充実を考え新年度から六十五分授業の二期制の採用などを計画、一層の進学率の向上に努めたいと述べた。

ついで、今野陽三氏（S20）の乾杯で懇親会に入り、自己紹介を交えながら思い出話がとび出し、和気あいあいのうちに校歌を斉唱、栗林猪太郎氏（S3）の万歳三唱で解散、秋田出身者の経営する「きりたんぽ田村」に流れ、別れを惜んだ。

秋田の記念総会参加を約束

在京三三会が〝高楼の宴〟

昭和三十三年卒の在京、三三会は十一月六日夜、JR浜松町駅前の国際貿易センター39階ホールで、年一回、三年続きの例会は参会者三十五人。

去年は畳座敷に鍋物囲んでの和食風から今回は一転、ハヤリのビュッヘスタイルの立食風景。洋食献立に挟まれてなつかしや、トンブリとハタハタの輝き。在郷、「三三会」宮崎会長からの心尽しでありました。去年、四十数人の顔ぶれから今年の集まりはやや淋しくあったが、考えてみればこの一年は卯年でわれらが四回り目のエト。まさに盛りの「ふるさと戦士」は、みんな忙しい。とまれ、東京でも冬足はことのほかのろく、木枯し吹き来る前の、文字通りの「高楼の宴」。はるか眼下に黄塵を見下してくみかわす酒の味は、また格別だった。

◇　◇

戦後十三年目の昭和三十三年春、旧17連隊跡の校舎を離れた仲間も、64年は卒後三十周年を迎える。中には「おジイちゃん」の尊名を戴く者もいるはずだったが、そんなセンサクは忘れて、三十年前の思い出を語り、ひたすら杯を交わす。それぞれが持ち寄ったふるさとの匂い。そこには日々の家庭の団らんや職場の仲間との語らいとは別の、しみじみと心をなごませる趣がある。

64年の秋田で開く卒後三十周年の記念総会に大挙して押しかけようとの約束を交わした。（大高　記）

出口氏も出席和気あいあい

西仙北支部定時総会

昨年十一月待望の支部結成以来、二回目の定時総会を十一月二十八日(土)午後五時より刈和野「柳寿し」で、会員二十三人出席、新調なった「秋田高等学校同窓会西仙北支部旗」のもとご来賓として、同窓会本部より塩田会長・榊田副会長（校長先生）桜谷事務局長の三氏、参議院議員出口先生、大曲支部長加藤氏のご臨席を頂き開催。

開会宣言後、多くの物故された同窓生に、謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈りし、次に懐かしい「校歌」を斉唱。

平沢支部長の挨拶後、日野幹事より提出の全議案、満場一致で可決承認。

今年度からの新入会員の紹介後、ご来賓ご挨拶をお願いし、最初に、塩田同窓会会長さんの同窓会の事業計画と、同窓会に対する協力要請、同窓生の結束のお話があり、次いで榊田校長先生の学校の現況説明があった。次いで、当支部設立の功労者である参議院議員出口先生のユーモアを交えた卓越した得意の話術で参会者の心を和らげて下され、早速懇親会に入る。

森副支部長の開宴の挨拶後、土肥氏のご発声で乾杯。

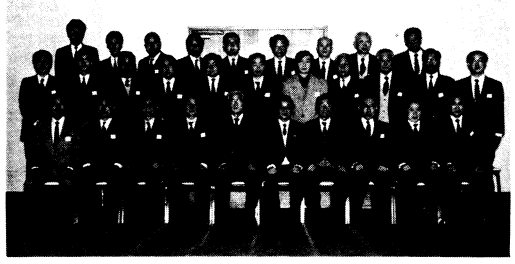
丁度五十歳の年齢差の参会者も居りしも、和気あいあい在校当時の思い出話にも花が咲く。

又、大曲加藤支部長さんは、四十年前の、西仙北支部の親支部、大曲・仙北支部結成当時の苦労話など承る。

夜の更けるのも忘れ杯を汲み交わし、益々意気盛ん。円陣を組み、校歌副歌・校友会歌・凱歌等放吟。

九時半、逸見幹事長のご発声で万歳三唱、又会う日を楽しみに、散会した。

（幹事　小西寿一　記）



磯村氏を招いて文化講演会

男鹿支部の総会

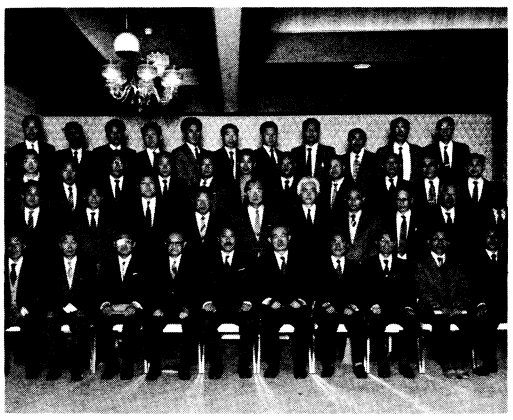
男鹿支部は六十二年十一月十四日(土)、午後三時・男鹿駅前・ホテル諸井で磯村朝次郎氏（昭二十五年卒・前秋田県立博物館学芸課長・男鹿市史再編委員会副会長）による講演会を秋山秀麿幹事長（昭二十七年卒）の司会で開催。演題は「男鹿半島史―中世史上の男鹿・安東氏」で、鎌倉末期、津軽から男鹿半島に進入し慶長七年・佐竹氏の統治まで約三百年間、秋田郡一帯を統治した状況を九十分間、一般市民を含めて二百人の聴衆に高邁な学識に依る熱弁をふるった。

その後、六十二年度総会を開催し加藤義孝支部長（昭十六年卒）の挨拶と来賓の京野同窓会副会長及び大谷教頭の祝辞があり、議事に入り秋山幹事長から『事業・決算(約百万円)報告』等があり、役員改選に移り再選者を含む新役員を選出。

記念写真を撮影後、森山勇一郎副支部長（昭十三年卒）の乾杯で懇親会に移り親睦を高めた後に、渡辺昭男副支部長（昭二十年卒）と幹事・小林敏昭氏（昭二十八年卒）の高らかな音頭で校歌を斉唱、万歳を三唱し盛会裡に終了した。

なお、六十三年一月二十四日(日)正午、ホテル諸井で新旧役員会を新旧役員三十六人が出席し開催。今後の支部運営、推進について協議し、かつ親交を深めた。

（秋山秀麿　記）



事務局だより

▽羽後町在住の柴田久助氏（T13卒）より、同窓会を通じ母校図書館に「幼学綱要」全七冊以下四十八冊の古書が寄贈されました。厚くお礼申し上げます。

▽「秋高百年史」定価の半額（一、五〇〇円、郵送料込二、〇〇〇円）で頒布する。希望者は事務局まで。

▽昨年度から実施された年次会費は、五十年次にお願いしたところ、三十六年次からご協力をいただき、お蔭様で予算額を上回りましたが、残念ながら左記年次は未納でしたので本年度はよろしくお願いいたします。

昭16、20④、34、35、41、43、44、45、47、48、50～53。

▽役員会費の納入率は、本年度七八・六%でした。ほぼ定着しなお感がありますが、今暫くの間特に若い年次の理事の方々の協力をお願いいたします。

▽だより二十五号以降の会務は次の通りです。

◆12・22　常任理事会◆1・3　昭54卒同期会◆8　市役所羽城会◆9　昭17卒同期会◆10　昭32卒同期会◆16　昭26卒同期会◆2・19　大館支部総会◆25　常置委員会合同会議◆3・7　新入会員入会式◆16　東肥羽城会◆21　八郎潟支部総会◆24　湯沢支部総会◆26　井川支部総会◆4・14　当番年次打合会◆18　広報委員会◆23　昭和町支部総会

年齢格差55歳でも話はずむ

湯沢雄勝支部総会

去る三月二十四日、当支部昭和六十二年度総会が、湯沢ロイヤルホテルにて開催された。

年度末、地方選挙など加重なり、最悪の時期の開会であったため、出席は十七人と例年の半数程となってしまった。

学校の近況、同窓会の動勢を桜谷吾朗事務局長が報告し、続いてお願いし御来会いただいた吉井忠亮先生のお話を伺った。

当支部会務報告、幹事選任、物故会員の冥福を祈った後、本日出席の最長老、三好功一先輩（大正十三年卒）の発声で乾杯し、懇親会に入った。この日の年齢格差、実に五十五歳。でも同じ学舎に学んだというだけの縁が新旧人類、戦前中後の違いも何もかも払拭し、深更まで懇談が続いた。（阿部　記）

編集後記

○…諸行事を遅くならないうちに伝えたい、と自ら提案して年三回発行としたのに最初から一カ月遅れ。遅れた理由は諸々あるがあえて弁明はしない。誠に申し訳ない。次号からは必らずと深く反省している。

○…新たに羽柴、大和、谷野、田口の四君が加わり、学校側委員の出口、佐藤両先生、旧メンバーからの山寺、石井両氏と小生の九人で広報委員会が構成されることになった。広報担当の小林副会長、事務局の桜谷先生を良きアドバイザーにチームワークを固めたつもり。（信太　記）